

インド洋沿岸諸国で約三十万人の死者・行方不明者を出したスマトラ沖地震から、二十六日で三カ月。最大被災地インドネシア・アチェ州でも、本格復興へ準備が進む。しかし、津波で家族を失った記憶は、被災者の脳裏から消えない。親を、子を思い、涙があふれ出す。特に子供たちの「心の傷」を癒やすには長い時間がかかりそうだ。

スマトラ沖地震3カ月

州都バンダアチエの国営話し始めると、涙が止まらぬ孤児施設「恵みの家」。いなくなった。

スラム教のコーランを朗読 同施設で生活を始めたする子供たちの声が聞こえ、津波のショックでなっている。九一十七歳の計約 言語障害が治らず親類が百人が暮らす。ストリート 引き取った少年もいたといチルドレンの収容施設だったが、津波で家族を失った子供が今は大半となった。

恵みの家

津波で壊滅的被害を受ける

た同州西部ロン出身の少女 ユニセフは州内十七カ所プトリ・ムリヤニさん(五)の「子供センター」で、計は優しい人ばかりで幸せ。約一万一千人の子供を対象将来は医者になりたい」と、放課後に約二時間、体明るく語っていたが、両親 育や図画などの活動を実と妹を失った津波の記憶を 施。地元イスラム教組織や

癒えぬ被災児の心



スマトラ沖地震の最大被災地インドネシア・アチェ州の州都バンダアチエにある国営孤児施設「恵みの家」で、コーランを朗読する少女たち=23日(共同)

親思い、あふれる涙

国内外の非政府組織(NGO)も同様の試みを始めた。同国バリ島の民間孤児施設運営者ラムゲン・シレッ

トさんは、アチェ州で「恵みの家」の二倍以上の規模の施設建設に着手した。

国内外の非政府組織(NGO)も同様の試みを始めた。同国バリ島の民間孤児施設運営者ラムゲン・シレッ

トさんは、アチェ州で「恵みの家」の二倍以上の規模の施設建設に着手した。

津波の直撃を受け、今も見

渡す限り、がれきの山だが、

館のほか、他のNGOと協力して、阪神大震災の

帰りにたくない

三カ月経過しても地元紙

る。しかし大半は空き家の

協力して、阪神大震災の

はまだ。

「家に一回行ってみたいけど怖い。帰りにたくない」。母親と姉を失った少女ムティアラさん(三)は帰宅を拒否し、約十キロ離れた丘陵地の父親の知人宅に身を寄せる。父親は「我慢強く待つしかない」とため息をついた。

AMDAも支援

震災後、州内で巡回診療を続けていた国際医療ボランティアAMDAは、民間の被災者相談所「トラウマ(心的外傷)センター」を夫婦で運営する地元の国立ジャカラ大学のバフティアル・ニトラ講師は「今のところ、深刻なトラウマのケースはそれほど多くない。アチェの住民は津波以前から独立紛争で苦労している」と分析している。(バングアチェ共同＝上村淳)

被災者アチェ州に呼び、体験を語る催しも実施した。

AMDAの同プロジェクト担当、金山夏子さんは「三カ月たって、ようやく話すことができるようになったという子供がいた。時間がかかるケアで、長期的な取り組みがどこまでできるかが課題」と語る。